

# 宮崎駿の戦争体験と 戦後民主主義から生まれた思想

## 映画『風立ちぬ』(2013)という到達点

浅野 風太

本研究は、アニメーション映画監督の宮崎駿に着目し、宮崎の思想を体系的にまとめ、思想的到達点を明らかにするものである。宮崎駿の映画作品は、作品世界の根幹部分に存在する主題や中心的なテーマに関して注目されてきた。そのテーマに関しての研究は数多くされてきた。しかし、宮崎駿という人物そのものの思想という点に関しては、体系的に研究したものは管見の限りはない。また、映画『風立ちぬ』(2013)に関する研究は過去作品と比較して少ない。映画『風立ちぬ』(2013)の時期の思想は、それまでの思想的変遷を踏まえることで明らかになる。本研究の目的は、これまでの多くの宮崎研究で行われてきた作品論ではなく、宮崎という人物に焦点をあて、そこから宮崎の思想の変遷と、思想的到達点を解明することにある。

第 1 章では、宮崎の幼少期から青年期に焦点をあてた。そこで、宮崎には戦争体験と戦後民主主義によって植え付けられた自己否定と劣等コンプレックスの感情が存在することを考察した。また、その感情から自己を解放するために社会主義に傾倒していったことを明らかにした。

第 2 章では、1980 年代から 1990 年に焦点をあてた。宮崎が新たな思想として照葉樹林文化論に着目し、自己の解放を達成したことについて論じた。1980 年代に、アミニズムという信仰に可能性を見出したこと、1990 年代になるとその限界を指摘したことを明らかにした。そして、新たに手入れたこと「個」という視点に関して考察した。

第 3 章では、映画『風立ちぬ』(2013)の公開時期周辺に焦点をあてた。宮崎の父である勝次による影響を参考に、本作が戦争賛美や戦争反対を描いているのではなく、人間の刹那的な生を描いたことを明らかにした。国家、共同体、「個」という形で縮小化されてきた視点と、生への探求という切り口から思想的到達点を考察した。

終章では、「個」と「種」、「私」と「公」の比較を行なった。宮崎の思想を思想史研究の文脈で整理するために、吉本隆明を比較対象として取り上げて考察した。これまでの思想的変遷をもとに、宮崎は幼少期に植え付けられた自己否定の感情を、「公」よりも大きな概念としての「私」という思想で乗り越えたことを明らかにした。